

高校日本史におけるコンピテンシー・ベース評価に関する研究

—大学入試問題の分析と授業改善の方向性の検討—

濱田 風香

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 これから求められる「資質・能力」の整理

第1節 コンピテンシー・ベース評価への転換を目指す背景

第2節 「資質・能力」の定義

第3節 「資質・能力」の共通点と高校日本史で育成する「資質・能力」

第2章 センター試験・共通テストに着目する意義と評価問題の分析と考察

第1節 センター試験がもつ役割とその評価

第2節 共通テストが目指すコンピテンシー・ベースの評価問題

第3節 各評価問題の分析

第4節 高校日本史におけるコンピテンシー・ベースの評価問題の特徴

第3章 高校日本史における評価問題の構想と実践、その考察

第1節 単元、本時で取り扱う内容と実践校の生徒について

第2節 評価問題、授業の構想

第3節 実践した授業、評価問題の分析と考察

終章 研究のまとめと今後の課題

第1節 研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献・参考論文・参考URL・参考資料・巻末資料一覧

2. 問題の所在と研究の目的

(1)問題の所在

本研究を進めるにあたり、高校日本史でコンピテンシーを評価する際に、生徒が学習したことを活用して「何かをできるように」になっているか、ということをもとにどのように評価するのかが曖昧な点が問題であると筆者は考える。

2018(平成30)年に告示された高等学校学習指

導要領において、教育の目標・評価をコンテンツ・ベース(内容重視)からコンピテンシー・ベース(能力重視)へ転換することが大きなテーマの1つとして示され、目標に関しては学習指導要領において明記されている。しかし、目標が達成されたかどうかを測る評価について、その方法や基準は明記されていない。

高等学校での学習内容を「評価」する方法の1つとして大学入試試験がある。これまでの「大学入学選抜大学入試センター試験(以下センター試験)」に代わり、2021(令和3)年度試験から「大学入学共通テスト(以下共通テスト)」の実施が予定され、大学入学試験は大きな転換を迎える。大学進学を目指す生徒が多い高校の授業は大学入試の影響を受けやすいため、そのような高校の授業は大学入試改革と一体となって改革が進められている。しかし、授業を実際に行う教員が大学入試の変化に気付かなければ、授業はこれまで通りコンテンツ・ベースで行われることが予想される。コンピテンシー・ベースの授業へと改善していくためには、大学入試改革を見据え、生徒に求められる「資質・能力」とは何か、明らかにする必要がある。

(2)研究の目的と方法

本研究の目的は以下の3点である。

1 点目は、これからの時代を生きる高校生にどのような「資質・能力」が求められているのかを整理することである。

2 点目は、高等学校地理歴史科・日本史科目(以下高校地理歴史科、または高校日本史)におけるコンピテンシーを評価するための評価問題で求められる観点を明らかにすることである。

3 点目は、高校生が求められる「資質・能力」を身につけるための具体的な授業改善の方策を検討し、その方向性を明らかにすることである。

本研究の方法について述べる。はじめに第1章で、これからの時代を生きる高校生に求められている「資質・能力」を、キー・コンピテンシー、21世紀型能力、学士力、社会人基礎力の4

つの「資質・能力」の共通点を見出すことにより、明らかにする。次に第2章ではセンター試験がもつ役割とその評価、共通テストが目指すコンピテンシーを測る評価問題の姿を明らかにし、センター試験日本史B 本試験、日本史A 本試験、共通テストプレテスト日本史B の3種類の試験問題を分析、考察する。

最後に第3章では第2章で明らかにしたコンピテンシーを測る評価問題の特徴をもとに評価問題を構想し、実践したものを分析し、考察する。

3. 論文の概要

(1)第1章 これから求められる「資質・能力」の整理

第1章では、コンピテンシー・ベース評価へ転換される背景と、どのような「資質・能力」が求められているのかについて述べた。

第1節では、コンピテンシー・ベースの評価への転換を目指す背景について明らかにした。「大学全入時代」となって久しい現在、変化が大きく、複雑な社会に対応して生きていくためには、大学教育の「質」の維持・向上を図る必要がある。大学教育改革はそのような認識のもとで進められているものである。DP・CP・APを明示し大学教育を見直す場合、APに基づいて大学入試の方法を変える必要があり、それに伴って高校教育を変える必要がある。つまり、大学から高校まで「資質・能力」に一体性・整合性がある改革が進められていることが分かった。

しかし、現状は各機関・団体が提言している「資質・能力」がそれぞれ別個独立しており、一体性・整合性をもった「資質・能力」とは何か明らかになっていない。

そこで、第2節では、キー・コンピテンシー、21世紀型能力、学士力、社会人基礎力の4つの「資質・能力」の定義を整理した。

第3節では4つの「資質・能力」の共通点を明確にし、高校日本史で育成を目指す「資質・能力」と強く関連していることを示した。具体的には、地理歴史科で育成を目指す「資質・能力」の目標のうち、「(ア)基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得」が下表の「知識」や「技能」に、「(イ)「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力、表現力、判断力等」の育成」が「思考力・創造力」に、「(ウ)主権者として、持続可能な社会

づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」が「人間性」に密接に関連していると言える。各「資質・能力」は構造には差異があるものの、要素において共通し、さらにそれが高校の各教科の目標にもつながっていることを明らかにした。

(2)第2章 センター試験・共通テストに着目する意義と評価問題の分析と考察

第2章では、センター試験・共通テストに着目する意義と評価問題の分析、考察をした。センター試験は毎年約52万人が受験する大規模な試験であり、その目的は高校卒業段階、つまり大学入学前の段階に必要な基礎的な学力を測ることにある。つまり、大学等に進学する高校生の基礎的な学力を測る評価問題としてセンター試験は機能している。その規模の大きさと性質から、センター試験と新しく実施される共通テストに注目する意義があることを示した。また、センター試験と共通テストで測っている「資質・能力」を比較することにより、どのような「資質・能力」が高校生に求められるのかを明らかにした。

第1節ではセンター試験がもつ役割とセンター試験に対する評価について整理した。

第2節では共通テストが目指す評価問題について整理した。ここでは問題作成の方向性の要点が3点、明らかになった。1点目は、用語に関する知識ではなく、事象の意味や意義、特色や相互の関連に関する知識を測る問題を作成しようとしていることである。2点目は、資料から得られた情報や知識を活用しながら仮説を立てたり歴史的事象の展開を考察したりする問題を作成しようとしていることである。3点目は、テーマを設定したり、時間軸を長く取ったりした問題を作成しようとしていることである。

第3節では2010(平成22)年から2019(平成31)年のセンター試験日本史B 本試験、同日本史A 本試験、2017(平成29)年と2018(平成30)年に実施された共通テストプレテスト日本史B の分析を行った。問題構成に関して、センター試験は「知識」を測る問題が約9割を占め、その内訳に注目すると「単発知識」または「単発知識」を含む問題で5割以上を占めていること、「思考力・判断力」を測る問題がほとんどないことがその特徴として挙げ

られる(日本史B は360 問中3問、日本史A は332 問中1 問)。一方で、共通テストプレテスト日本史B では「知識」を測る問題が全体の5 割にとどまり、「思考力・判断力」を測る問題は67 問中34 問と、全体に占める割合がセンター試験と比較して格段に高くなっていた。

また、史資料を使用した問題でどのような力を測っているかについては以下の図に示した。センター試験日本史B は360 問中 73 問、同日本史A は332 問中 61 問、共通テストプレテスト日本史B は63 問中 35 問に史資料が使用されている。センター試験日本史B と日本史A はその構成が類似しているが、共通テストプレテスト日本史B は「史資料から読み取ったことを考察したり背景を推察したりした選択肢を判断する」問題に特に差異がある。

図 2-3-1-3 2010(平成 22)年～2019(平成 31)年センター試験日本史 B 本試験史資料問題分析

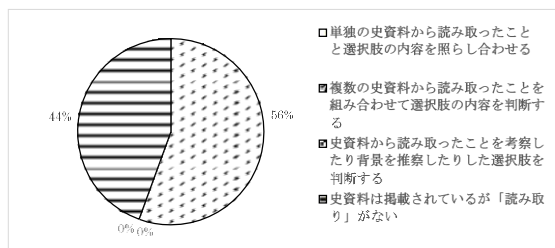


図 2-3-2-3 2010(平成 22)年～2019(平成 31)年センター試験日本史 A 本試験史資料問題分析

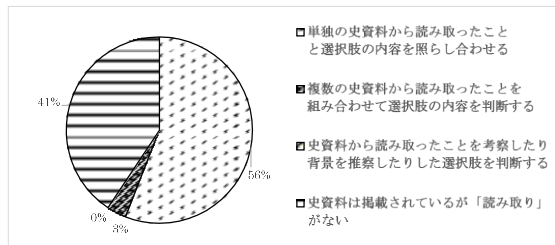
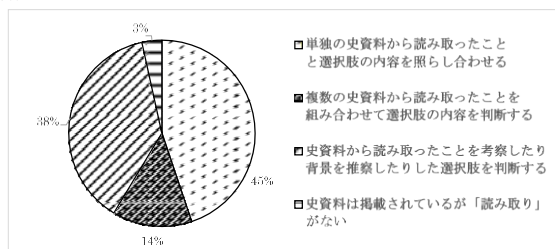


図 2-3-3-3 2017(平成 29)年、2018(平成 30)年共通テストプレテスト日本史 B 史資料問題分析



以上から明らかになった共通テストプレテストの特徴を第4 節でまとめた。共通テストプレテストの特徴は以下の5 点である。1 点目は、知識偏重の試験問題から改善を図っていることである。これは問題全体の構成から明らかになった。2 点目は「知識」を測る問題について単独の知識を問う問題だけでなく、複数の知識を絡めた問題

が多い点である。「知識」に分類された問題のうち「単発知識」が占める割合はセンター試験日本史 B が 50%、センター試験日本史A が 46%だったのに対し、共通テストプレテスト日本史B では 38%であった。3 点目は、「技能」を測る問題について、複数の史資料から読み取った情報を基に選択肢の正誤を判断する問題や、考察したり推察したりする問題が多い点である。センター試験日本史B が史資料を使用した問題のうち56% が単独の史資料から読み取る問題でセンター試験日本史A もほぼ同様の結果であった。一方共通テストプレテスト日本史B は、単独の史資料から読み取る問題は45%、複数の史資料から読み取る問題が14%、「思考力・判断力」と絡めた問題が 38%であった。4 点目は「思考力・判断力」を測る問題について、多面的・多角的に思考する力を測る問題が多い点である。これもセンター試験日本史B、日本史A とともに数問しかなかったのに対し、共通テストプレテスト日本史B では34 問であった。5 点目は、史資料から情報を読み取る力が重視されている点である。このことは問題全体の構成に対して史資料から読み取る問題の割合から明らかになった。

(3)第3 章 高校日本史における評価問題の構想と実践、その考察

第3 章では、第2 章までの分析をもとに評価問題と授業の構想と実践、その考察をした。

第1 節では、単元、本時で取り扱う内容と実践校の生徒の実態について述べた。本時で扱う単元及び内容は「中世社会の成立、院政と平氏の台頭」のうち、奥州藤原氏と平泉についてである。

第2 節では評価問題と授業を構想し、それぞれどのような「資質・能力」を測る意図があるのか、目標を達成するために授業において留意した点について述べた。評価問題は第2 章で明らかにした共通テストプレテストの特徴を踏まえて構想し、政治の中心が貴族から武士へと移り変わっていく過程の中で、地方で武士が活躍した様子として平泉を取り上げ、かつ平泉が繁栄した理由を各地との交易という観点で理解できているかを測ることを意識した。授業では、「平泉が列島とアイヌ世界の間に位置して交易に携わり、ターミナル都市として交易が盛んに行われたことを、複数の資料から考察することができる(思考力・判断力・表現力)」を本時のねらいとし、平泉が繁栄した理由を、生徒が

複数の史資料から読み取ったことをもとに考えられるようにした点、評価問題で使用する資料のうち一部を授業で用いなかった点、必要な知識を押さえられるよう工夫した点の3点に留意して構想した。

第3節では実践した授業と評価問題を分析、その結果を考察した。授業分析はワークシートへの記入をもとに行い、授業者が留意した点と生徒の注目した点が一致しているかについて分析した。結果は、おおよそ授業者の留意点と生徒の注目した点は一致していた。一方で、文字資料の読み取りについては生徒が資料の内容ではなく語句に注目していることが分かった。正確に資料から情報を読み取るためには語句に注目するだけでなくその内容を読み取らないと、その内容を誤って解釈することがある。

評価問題分析は、実施した評価問題の結果をもとに行った。「知識」や「技能」をもとにした「思考力・判断力・表現力」を測る問題を中心とした出題であったため、誤答の場合にどの「資質・能力」に課題があるのか見極めが難しいといった作問上の課題は多かった。しかし、授業展開の工夫が正解率の高さにつながったと考えられる問題もあった。

最後に第3節では、これらの結果から、具体的な授業改善の方法についてまとめた。知識や資料から読み取った情報をもとに考えたり表現したりする「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す本授業の改善点は、資料から読み取った情報からどのようなことが考えられるか、考えたり表現したりする活動を意図的に取り入れることである。このとき重要なのは生徒が考えたり表現したりするのに必要な時間を確保するだけでなく、生徒の思考の流れに沿った発問をしたり、生徒の気付きを掘り下げてより深い理解ができるようにしたりすることである。

4. 今後の課題

今後の課題として以下の4点を挙げる。

1点目は、定期考査の問題や民間試験の問題等へ研究対象をさらに広げることである。本研究の対象は、一般に公開されているセンター試験と共通テストプレテストに限定したが、実際には幅広い学力層の高校生がおり、全ての高校生が大学や短期大学への進学を目指すわけではない。そのた

め、今後は現場レベルの評価問題にも研究対象をさらに広げ、進学を目指すわけではない高校生に求められる「資質・能力」や、それを測るための評価問題の作成も求められる。

2点目は、2022(令和4)年より新設される新科目、歴史総合と日本史探究の2科目で育成する「資質・能力」の結びつきを意識して評価問題の作成、授業の実施等を行うことである。それぞれの科目で設定されている目標から、2つの新科目で育成を目指す「資質・能力」が異なることは明らかである。2つの新科目を通して高校地理歴史科日本史科目で目指す「資質・能力」を育成することができるよう、2科目の結びつきに着目して研究を進めていくことが必要と考える。

3点目は、「資質・能力」を測る評価問題の作成について、さらに改善を重ねることである。本研究で実践した評価問題は、知識や資料から読み取った情報を基に考えたり判断したりする「思考力・判断力・表現力」を測る問題が中心であった。しかし、このような問題は複数の「資質・能力」が絡み合っているため、それだけでは生徒のどの「資質・能力」に課題があるのか、判断できなかった。特に「表現力」に関しては地理歴史科だけではなく、他教科、他科目との連携が欠かせない「資質・能力」であると言える。必要となる「資質・能力」を単元や学習内容、または教科や科目ごとに整理し構造化して出題することが大切である。生徒の課題を明らかにして授業改善をすることで初めて評価問題としての機能を果たすことができるだろう。

4点目は、単元を通観する「問い」を立てる活動と、コンピテンシーの関係性を明らかにすることである。授業改善の方向性の1つに単元を通観する「問い」をたてる活動が挙げられるが、「問い」をたてる活動を生徒がした結果、育成を目指す「資質・能力」、すなわちコンピテンシーを身に付けることができるかは明らかになっていない。今後は単元を通観する「問い」が成立する条件明らかにするとともに、目指す「資質・能力」が育成できるのか、その関係性についても明らかにしていきたい。